

アトリエ 琉游舎 だより 218号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2025年11月19日発行

奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の 声聞くときぞ 秋は悲しき



○百人一首に所収されている猿丸太夫の有名な歌です。奥深い山で紅葉を踏み分けながら鹿の声を聞くと、秋はひときわもの悲しく感じられると詠っています。一面に降り積もった紅葉の落ち葉を踏む音にも、寂しげな鹿の鳴き声にも、そこはかたない悲しさや無常感を感じるのは、これから冬の厳しさと時の移ろいを人も鹿も身に染みているからなのでしょう。

○奥山とはどれほどの山道に行くのか分かりませんが、実際貴族が獣の住処まで足を踏み入れるとも思えませんから、別荘の裏山か、それとも書斎で想像して詠んだのかもしれませんが。俗世を離れようとすると、人は陽光降り注ぐ海辺ではなく、木がうっそうと茂る暗い森の中を目指すのでしょうか。森に住む獣たちの声を歌枕に、歌を詠んでいる姿が目に見えます。

○まだ暗い晩秋の早朝4時、道向こうの林の中から、バタンバタンという音とともに、獣のうなり声のようなものが聞こえてきます。箱罾に猪がかかった音です。今まで何度も罾に猪がかかっていますが、不思議と真冬や真夏にかかることはなく、早春から6月頃までと、10月から初冬までの間です。冬をじっと過していた獣たちが活動を始めた時期と、冬に向かって栄養を体に蓄えるときに、里の近くに現れて餌を探すのでしょうか。油断をすると春は百合格、秋は薩摩芋や里芋を掘り返される被害に遭います。しかし農作物被害はあっても人が襲われたことはありません。せいぜい車と鹿や猪が衝突して車が大破したという被害までです。

○ところが昨年辺りから、我が家から半径10キロ以内の里山でも、熊の目撃情報が数度もたらされています。早晩、何度か散歩していた裏山の道にも出没するかもしれません。熊が紅葉を踏み分ける音とうなり声が、朝の目覚ましの音になってしまったとき、果たして平安貴族のような歌を詠むことは可能でしょうか。一時騒がしかった「熊を駆除するな」などの熊との共棲を求める声は、最近の熊被害であまり聞こえなくなりました。人は自らが安全地帯にいて初めて共棲や愛護と言うことが言えるのではないかと、昨今の熊被害を見るにつけ思わずにはられません。

11月・12月スケジュール

			木	金	土	日
			20	21	22	23
火	水					
24	25 読書会 13時半から	26	27	28	29	30
12月1日	2	3	4	5	6	7 写経会 13時半から
8	9 読書会 13時半から	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	21	21

読書会

11月25日 (日)
12月9日 (日)
13時半から

写経会

12月7日 (日)
13時半から

狂言綺語…陀羅尼

我が家に隣接する土地の松が三本倒れました。松食い虫にやられていたようなので、倒木の危険を土地所有者には知らせてはいたのですが、夜中の雨と風で、朝起きてみたら道路に倒れていました。台風でも竜巻でもなく、強い雨でも風でもなかったのですが、人や車が通行しているところに倒れたら、電線を切断したら、我が家の屋根に倒れたらなど考えると、対処の仕方が事前にあったのだろーと思わずにはいられません。自然災害の起こる原因は防ぎようがありませんが、災害に対する備えは常におこななければいけないと言うことです。しかし私を含め、いつ起こるかも知れないこと、自分の身に起こるかどうかかも知れないことへの日頃の備えに人が切迫感を持ってないことは、防災対策の難しさです。災害を備えの不備の点からは人災、人智で及ばない自然の脅威を天災と呼ぶのはきっと自身の備え不足を糊塗したいからなのかもしれません。

地震はなくすることが不可能な災害ですし、突然やってくるので退避もできません。予知ができるとは言っても、確実性の点で社会生活を犠牲にしてまで、その予知に従うことには無理があります。できることは地震が起きたあとの、できる限りその被害を拡大させないための、自分自身への備えだけです。特に大地震が起きた瞬間は、心の余裕もなく、早くこの揺れが収まって欲しい、これ以上強く揺れないで欲しいと心に念ずるしか方法はないと思われます。私の亡くなった母は、地震が大の苦手な揺れが来た瞬間「ナンミョホウレンゲキョ、ナンミョホウレンゲキョ」と、手をすりあわせて早口小声で何回も繰り返していたことをよく覚えています。この呪文のようなまじないの言葉は、早く揺れが収まって欲しい、これ以上大きくならないで欲しいと神仏に訴えるためだったのか、自分の動転を鎮めて正気を取り戻すためだったのか、地震の主を呪う言葉だったのかは分かりません。ただ子供の私には、呪文を唱えている母の姿は鮮明に覚えています。後になってこれが「南無妙法蓮華經」のことだと知って、呪文ではないことを知りました。僧侶の私にとって「南無妙法蓮華經」は法華經の教えへの皈依の言葉であり、信仰告白の言葉です。しかし母にとっては、人間の力の及ばない自然の力を、呪文の靈力で押さえ込もうとした試みではなかったのではと思っています。

法華經陀羅尼品第26は呪文の章です。陀羅尼はサンスクリット語の「ダーラニ (dhāraṇī)」を漢字に音写した言葉で、「総持」と訳されます。仏教語としての厳密な意味は、「いっさいの言語説法を記憶して忘れないとの意味であり、陀羅尼を繰り返し繰り返しとなえれば雑念がなくなって禅定に入り、その結果いっさいの言語説法を記憶することができる」と言うことですが、原意は「呪文」です。法華經陀羅尼品のサンスクリット語からの訳文も「呪文」となっています。呪文を宗教学的に位置づける能力は私にはないので、「呪」という言葉から受ける一般的な視点からみると、第1は「他人に災いが生じるように神に願う、呪いや呪詛」、次に「自分の災いを取り除くために神仏に願うまじない」が、仏教者以外のごく常識的な受け取りだと思われます。最後は仏教者の理解としての陀羅尼（総持）となります。これは「真言」とも言います。

私は僧侶となるまで呪文が仏教文脈の中で語られていることを知りませんでした。原始信仰、民間信仰の範疇の、不可視でおどろおどろしい靈力が作用する、超自然的世界の言葉だと思っていました。仏教はお釈迦様の教え（法）にすべての「信」をおくことから、日々の行為が始まると言うことが、私の仏教理解です。「信」が指し示す安らぎの処への道をありのままに進むことが「行」であると言う「信行」が仏教です。だから、ありのままの世界、大いなる宇宙の真理以外に、私に慈悲と安らぎを与えてくれるものはないのです。しかし、現実に唱えられる真言や総持は加持祈祷のためのものです。それはある靈力をもつ超自然的な存在に私の「行」を丸投げする行為です。私にはそれがお釈迦様とともに歩む「信行」の道とは思えません。私の理解の限りでは、お釈迦様がダーラニを唱えることが安らぎの道への歩みだと語ったことはありません。原始仏典の記述では、靈力について語ることはなく、心の平安を得るために如何に清浄な日々を送るかについての、自らの行動規範と方法を語っているということが私のお釈迦様の言葉の理解です。自らの日々を陀羅尼や真言に託して、超自然的世界に預けることが安らぎの道を歩むとはどう読んでも読めないのです。恐らく、陀羅尼や真言に己を預ける人達は、超自然的な存在そのものが仏様だというのが、仏様は預ける存在ではありません。預ける対象は仏様の法（教え）です。それが「信」です。超自然的な存在を措定して、そこに己の存在を丸投げしてしまっは、自らの行動の手足となる自灯明を自ら吹き消していることと同じなのです。法灯明を信じ、自灯明の照らす足下を歩むことが仏の道を歩むこと、それが仏教です。

法華經の陀羅尼品の呪文は何を意味するのでしょうか。「この呪文を加持祈祷に使いなさい。呪文を聞いた靈力があなたの災いを払い、願いを叶えてくれるでしょう」とは何処にも書かれていません。呪文を仏様に提案した菩薩や天は「法華經を説法し修行する者を守護するため、信行を妨げるものを寄せ付けないため」と述べています。この陀羅尼は法華經の行者を守護するための呪文なのです。漢文に音写された陀羅尼は音だけで、その意味を辿ることは不可能ですが、サンスクリット語では守護する言葉の投げかけの意味を辿ることは可能です。例えば冒頭の「**安爾 曼爾 摩訶 摩訶 旨隸 遮梨第 除咩 除履 多瑋 、 、 、**」は「不思議よ、思う所よ、心よ、無心よ、永遠よ、修行よ、寂靜よ、淡泊よ、変化よりの離脱よ、 、 、」^{注1}と訳すことができるようです。これらの陀羅尼によって心置きなく信行の道を歩むことができると言うことに陀羅尼品が法華經に存在する意味があるのです。ところが仏教伝来以来、陀羅尼が信行者を守護するためのものでなく、願いを靈力に丸投げする道具になっているように思えてなりません。これは仏教が仏教以外のものに浸食されているということなのではないでしょうか。

注1：庭野日敬「法華經の新しい解釈」